あり、解雇のような措置が必要なこともあります。また駐在員のいる出先では、現地情報を確保して発信します。重要なのは、インターネットに出てくる情報の原点となる種類の情報です。それらを行うのが私の仕事です。

社会的価値のある活動をしなければ、企業は永続できません。さらに企業が外国に進出して活動するには、独自の価値をもつ、いわばとんがった技術や商品が必要です。例えば皆さんも聞いたことがあるだろう台湾の半導体メーカーTSMCには、いま2ナノレベルの超先端半導体の技術があります。日本はもとより中国や韓国、米国を大きくリードしています。

事業では、小手先のことではなく、正論であることが重要です。そして短期的に収益を上げて、難しくなったらサッと撤退する、ということではなく、それが地域に根ざした産業の一脈として着実に成長していくことが望まれます。さきほど上げた台湾の液晶産業のような例ですね。

発展途上国であれば、未熟な産業が多いものです。逆に言えば、そこで新たに事業や産業を創出できるわけです。

**○自分はいかにあるべきかを考える**

優秀な駐在員であるためには、つねに自らを俯瞰して客観視することが必要です。

私は、中国の社員、そして中国の社会から自分の行動がいつも監視されている前提で暮らしています。その中で、いわゆる日本人らしい謙虚さや美徳、習慣を失ってしまわないように意識しています。

台湾でも中国でも、モーレツ社員がいます。すごい熱量をもって迫力を感じる仕事をする人が、かつての日本には少なくありませんでしたが、いまはむしろ海外の方にそういうタイプのビジネスマンがいると感じます。こちらが夜中過ぎに送ったメールに、30分後に返信が来るような人たちです。

それと、これは当然ですが、語学に堪能であれば海外で仕事ができる、というわけではありません。ビジネスを成り立たせるためには、その背景や基盤にある歴史文化、その国の流儀を身につけなければなりません。もちろん、そもそも人としての素養も問われるでしょう。

私は皆さんに、「海外に出て仕事をしよう！」と呼びかけていますから、いま大学で学んでいることがビジネスの社会でどのように応用されていくか、方向を示してみましょう。

まず語学。学生時代、私は中国語を勉強していませんでした。台湾・中国での仕事の必要に迫られて必死に取り組んだのです。最初のころ、こちらが言葉に不自由だとわかると、いろいろ腹の立つ思いもしました。タクシーの運転手にごまかされたり。「騙されたくない！」という思いが私を必死にさせました。

そして、経営学。私の仕事では、ビジネスの方針策定、目標管理、組織や事業づくり、人材育成、生産性向上、そういったことに取り組むベースに経営学があります。

会計学は、収支のチェック、法人ごとの収益力分析、配当といった分野に関わります。

商学なら、貿易実務や企業与信。情報システムであれば、企業情報ネットワークの構築、情報セキュリティ、WEBサービス。経済学では基盤となるマクロ経済統計の活用からミクロ販売価格戦略、価格弾力性など。さらには、文化の違い、国民性や気質の差異などと向き合うためには、文化人類学の知見が必要です。徹底した監視社会である中国という国の根底には、荀子の性悪説の思想がある、と先に述べました。

小樽商科大学を卒業した先輩の中には、いま現在上海で活躍されていらっしゃる方たちがたくさんいます。皆さんもご存知の緑丘会には、中国上海支部があるのです。定期的に集まって親交を深め、切磋琢磨しています。そして写真でご覧いただいているように、上海では小樽ビールが飲める店もあります。

では私の講義のまとめに入ります。いちばん言いたいことは、繰り返しますが、「海外にチャレンジしてみよう！」です。

語学力を身につけて、実際の仕事と生活で最大限活用してみましょう。そしてさらに磨きをかけましょう。どんな世界にも上には上が必ずいるのです。

海外で働くと言っても、まず日本で企業や団体に就職して海外駐在することをおすすめします。そうすれば

企業や組織の経営や運営、マネージメントが深く体験として学べます。

何事も好奇心が原動力です。未知の世界に飛び込みましょう。失敗を怖れることはありません。なぜなら、誰でもどうせ何かで失敗しているからです。もっといえば、世界は壮大な失敗のかたまりです。だから紛争や戦争が絶えないのです。あなた一人が失敗を怖れても世界に何の影響もありません。

といっても、自分のことは自分で守らなければ、誰も助けてはくれません。自分の行動を、自分で立てた規律に従ってコントロールしましょう。それが「自律」です。

他の誰のものでもない、あなたの人生です。君がやらなくて、誰がやるのか!?　険しい道だからこそチャレンジしましょう！

---

**◎三宅 英彦 氏（平成 6 年卒／公認会計士）**
**「会計士の業務とその可能性」**

---

**〇キャリアのスタートにあった、会計ビッグバンと拓銀の破綻**

皆さんの中には、公認会計士になりたいと考えている人もいると思います。今日は、会計士の具体的な仕事のことから、その枠組みの外にある可能性まで、さまざまにお話しします。

コロナ禍があり、円安という為替の乱高下があり、ウクライナでの戦渦は先行きが見えません。こうした加速度的に変化していく現代の不安定な世界に、若い皆さんはどう対応していけば良いでしょうか。そのヒントとして、職業会計士という選択肢がある、ということを示したいのです。公認会計士という資格を得ることで広がる人生の可能性についても、伝えたいと思います。もちろん、会計士志望ではない方にとっても役に立つ講義であるように努めます。

公認会計士にはどんな性格の人が向いているのか、という判断のヒントになるかもしれないので言いますが、（少なくとも他人から見れば）私は温和な性格で、かつ社交的な人間です。法人監査の過程ではクライアントやステイクホルダーたちと多くの議論を交わしますが、その場合でもいちいち感情をあらわにしていては仕事は進まないでしょう。私は、人とのコミュニケーションにあまり困ったことはありません。

1995（平成７）年に大手の監査法人に就職しましたが、ほどなくして北海道拓殖銀行が破綻しました（1997 年 11 月）。拓銀は私が就職したセンチュリー監査法人（現・EY 新日本有限責任監査法人）の札幌事務所にとって最大のクライアントであり、私はまだ公認会計士の登録もできていません。この先どうなるか、不安が募りました。大手なので屋台骨が揺らぐことはありませんが、札幌事務所がどうなるかが見えなかったのです。大きな銀行はグループ会社の広い裾野を持っています。不動産会社とかリース会社ですね。これらの仕事を失うかもしれないと危惧されました。

しかしまもなく、信用金庫や信用組合の監査基準が改められ、私たちは北海道でその業務に就くことになりました。預金総額 2000 億円、のちに 500 億円以上の金融機関の決算がすべて、監査の義務を負うことになったのでした。

このころちょうど、会計ビッグバンと呼ばれる、日本の会計制度の改革が進行していました。新しい会計基準が生まれていったのです。大づかみで言えば、グローバル化が進んで、企業が海外の会社と取引を行なったり、国際金融市場で資金調達を行なう際には、グローバルに通用する財務諸表を作成する必要性が高まっていた、という背景がありました。企業会計の管理方法を世界基準に合わせようとする動きです。

ここから、金融商品会計基準、固定資産の減損会計、キャッシュフロー計算書といった新たな概念が導入されていきます。

そして、それまでは企業グループの中核会社の財務諸表が主で、グループ会社のそれは従の扱いだったものが、あくまでグループ全体の業績を重視して、連結決算を中心とすることになりました。親会社にとって、子

会社を使った決算操作ができなくなったのです。

**〇公会計の世界を知る**

就職したセンチュリー監査法人は、合併によって太田昭和センチュリーという企業になっていましたが、私はそこで、国立大学の法人化のプロジェクトに参画することになりました。小樽商科大学をはじめとする全国の国立大学は 2004（平成 16）年 4 月から、大学が独立した法人格をもつ「国立大学法人」となるのです。北海道では、7 つの国立大学法人が生まれました。

この大きな制度改革にともなって、国立大学の会計基準も改められます。対応するプロジェクトの一員として、その現場を体験することができました。

それは 2002 年、サッカーの日韓ワールドカップがあった年で、4 カ月ほど猛烈に働きました。集められたのは個性豊かな精鋭ばかりで、得がたい経験でした。

チームに招集されたとき先輩から、君は夜中の 2 時から焼き肉食べられるか？と聞かれました。意味がわかりませんでしたが、なにしろ深夜零時に 1 時間ミーティングがあって、そのあと 1 時間くらいデスクワークに戻って、それからみんなで焼き肉店に行く、ということもあったのです。いまではそんな働き方はできないでしょう。

しかし一方で、人生には、がむしゃらにトライすることで成長を実感する時期もあるのではないか。私はそんな気がしています（もちろん心身を壊しては元も子もありませんが）。

ある先輩は、自分が関わって国の仕組みを変えていくんだ、と強く自負していました。そのために政治や政党の仕組みまで、ものすごい質と量の勉強を重ねていました。

でもここで達成感を味わうと、少しちがう気持ちが湧いてきました。

これまでは大企業や大きな組織を相手にした仕事でしたが、世の中の会社の大部分は中小企業です。実務の現場では、大企業などとはちがう幅広い仕事がたくさんあるでしょう。そういうことはこのままでは身につきません。

40 歳という年齢も考え、この先のキャリアのために、私は大手監査法人を辞めることにしました。

そこで監査法人を設立します。その法人を経て、現在は養和監査法人の代表社員・札幌事務所（2018 年 2 月設立）の所長を務めているわけです。

**〇会計士の仕事**

公認会計士の主要な仕事は、「法人の計算書類が適正であることを証明する」ことです。公認会計士法第 2 条 1 項にあるこれは一項業務と呼ばれ、公認会計士だけが独占的に行うことができる仕事です。

またその一環として、企業が健全に事業活動を遂行するための経営や財務のルールや仕組みが適正に運用されているかどうか、つまり「内部統制」をチェックします。

財務の報告とは、企業や組織が社会から信頼されるための基盤です。海外と同じように日本でも、2006 年に定められた「内部統制報告制度（J-SOX 法）」によって、全ての上場企業には、内部統制報告書と内部統制監査報告書の公表が義務づけられています。海外子会社の不正会計がニュースになることもありますが、海外子会社も同様です。公認会計士は、この制度に基づいて、企業側が作成した内部統制報告書が適正であるかを検証します。

またそのほかに、会計に関するアドバイザリーサービスを提供したり、税務に関するサービスを提供します。こうしたサービスの提供は、いわゆる二項業務と呼ばれます。

「法人の計算書類が適正であること」をもう少し説明しましょう。

監査とはそもそも、監督して検査すること。企業や学校法人などには、法令などの規定によって、監査が義務づけられています。

企業は、銀行から資金を調達したり、株主から出資を受けて活動します。従業員を雇い、設備を整え、製造

や営業、販売をしていくわけです。銀行にとっては企業に貸し出す資金は債権、企業にとっては債務です。

企業は、我々は適正に会計処理をしています、ということを、銀行や株主、あるいは得意先や仕入れ先などのステイクホルダーたちに報告しなければなりません。しかし当事者である企業がいくら自分で問題がないと主張しても、客観的なお墨付きがなければ、信用されないでしょう。そこで必要となるのが、監査法人なのです。

日本公認会計士協会（JICPA）では昨年（2022 年）夏、「倫理宣言」というステートメントを公表しています。前文にはこうあります。

「変化が激しく、確かなものが見えにくいこの時代。かつてないほど『信頼』の重要性が高まっています。我々公認会計士は、『倫理宣言』を実践することにより、今後も高い倫理観と専門的知見の維持・向上に努め、説明責任を究めたプロフェッショナルとして、世界を信頼で満たしていきます」。

「計算書類が適正であることを証明する」仕事は、その基盤に厳しい倫理観を据えています。

**〇公認会計士のやりがい、面白さ**

東京の監査法人を訪問すると、中堅どころでも、ホテルのロビーのような受付があり、社内のおしゃれなカフェで社員がノートパソコンを広げていたりします。札幌でも近年はとくに監査法人のオフィス環境はとても良くなっています。それが公認会計士の仕事の舞台です。

皆さん興味をもつと思いますが、報酬面ではどうでしょう。公認会計士の初任給はいま 500～550 万円くらいで、キャリアを積んで実績をあげていくとこれが右肩上がりになっていくでしょう。

公認会計士は 30 歳前後でも企業や組織のトップ層と日常的にやりとりをします。こういう会合や勉強会があるから、出席しませんか、などと誘われることもあります。さまざまな分野の優秀な人々とつながって人脈が自然に育っていきます。

一般の企業人なら、自分の会社が属する業界については広い知見や経験を深く積むことができますが、ほかの分野のことはちんぷんかんぷん、というケースが多いと思います。会計士は、さまざまなモノづくりや、サービスの現場、大学など、ふつうの人が関わる機会のないような世界にも接することができます。

また、私の場合はほとんど国内ですが、仕事の一環でいろいろな土地に出かけます。おいしいものとの出会いがつきものです（笑）。そしてそうした人や場所、分野と交わることで、知的満足が得られることも、会計士の仕事の魅力だと思っています。

以上説明したことに加えて、大手監査法人とちがって現在の私のような中小監査法人であれば、さまざまな分野に挑戦したり、より多くの法人の仕組みを理解したり、お客様へのより柔軟な対応が可能です。

では監査の手続きにはどんなものがあるでしょうか。

まず「実査」。現金や株券などが帳簿と照らして実際にあるかを確認します。そして、製品などの棚卸しの現場に行く「立会」。

スーパーマーケットであれば商品、病院なら医薬品、メーカーであれば部品や仕掛品（製造途中のもの）など、決算の期日にどのくらいの在庫があるかを確認します。

銀行との詳細なやりとりや経営会議などでの勘所を確認する「質問」も欠かせません。知識と経験がものを言う重要な仕事です。

ほかに、閲覧・視察・再実施・再計算、データや報告書などに基づいて調べていく分析的手続などがあります。

**〇公会計を軸にした進路づくりへ**

法令で義務づけられている監査を法定監査といいます。その種類は、会社法に基づく監査、金融商品取引法に基づく監査、保険相互会社の監査、特定目的会社の監査、一般社団・財団法人の監査、国や地方公共団体から補助金を受けている学校法人の監査などなど、たくさんあります。

近年の私は、公認会計士の枠組みを超えた分野へも仕事の領域が自然に広がっています。2017（平成 29）年には、先輩の会計士から休眠会社を買って定款を作り直し、（株）総経実務ラボというコンサルティング会社を立ち上げました。企業業務の問題解決から、税理士のサポート、財務・税務・労務などの手続き代行などを、会計士をはじめ税理士、行政書士、社労士など、士業のプロの皆さんと連携して行っています。

さまざまな専門家たちと連携することで、仕事の間口と奥行きが広がってきました。今日の最初にあげた、「公認会計士という資格を得ることで広がった人生の可能性」です。

地方公営企業の顧問や、公的研究費のガイドライン監査といった仕事もあります。また、地方自治体がある特定のテーマについて弁護士や公認会計士などと監査契約を締結する包括外部監査という制度があります。私はある市の介護認定の会議に関わり、自分の専門的な知見で貢献しながら、老人福祉の分野で私自身も多くの学びを得ることができました。

M&A（企業買収・合併）に伴う企業の財務・会計調査（財務デューデリジェンス）の仕事もあります。いずれも、自分だけではなく、まわりの専門家との連携によって、より質の高い成果が出せるように努めています。

最後に強調しますが、何をやるにも、自分ひとりではできません。重要なのは仲間です。仕事も遊びも（私の場合両者が被る場合も少なくありませんが）、仲間あっての自分だと思います。皆さんも学生時代から、そのことを意識してみてください。

商大のゼミの同級生にも公認会計士の仲間がいます。皆さんの中からもぜひ、公認会計士をめざす方がたくさん出てほしいと願っています。

---

**◎土方 直子 氏（昭和 63 年卒／兵庫大学）**
**「思いがけない道の先にまっていたもの～「偶然」をチャンスに変える生き方～」**

---

**〇思いがけないキャリアの過程**

今の私は、商大で学んでいたときの私が到底考えられなかった私です。しかしこうなったいきさつの芯には、とても自分らしい自分が居続けているとも思っています。いくつもの縁や偶然が連なった、「思いがけない道の先」にいまの私がいます。今日はあえてそんな自分を題材にして、キャリアについて考えてみましょう。

私は兵庫県加古川市にある兵庫大学でビジネス実務の授業をもち、学生のキャリア支援をしています。しかしふだんの授業で、私自身のことを赤裸々に題材にすることはありません。私にとって今日の講義はすべて、後輩の皆さんへだからこそ語れる内容です。

今日のポイントは、この 3 つです。

1. 偶然をチャンスに変える方法
2. これからの時代のキャリア開発の考え方
3. 自分の使命を知る

商大を卒業して 1988 年に北海道銀行に入行しました。秘書室に配属され頭取の秘書も務めました。

それから「ジョブカフェ北海道」という、北海道が設置している就職支援施設で、キャリアカウンセラーの仕事をしました。2007 年からは札幌大学女子短期大学部で特別任用教員。9 年間短大の学生たちにビジネス実務を教えて、2016 年からは兵庫県加古川市にある兵庫大学で、同じくビジネス実務などを教えています。秘書士、上級ビジネス実務士といった資格を取る科目の教員です。

**〇なぜか頭取秘書に**

当時の大学に、いまのようなキャリア教育なんてありませんし、就活のスタートは４年生です。もちろんインターンシップなんてありません。自分は何をしたいのか。自分に何ができるのか。わかりませんでした。で